

第5回 武蔵野市文化振興基本方針策定委員会 議事要録

○日時	平成29年12月15日（金）午後6時～8時
○場所	武蔵野芸能劇場 小ホール
○出席委員	◎小林真理、宮崎倉太郎、小川希、○酒井陽子、高萩宏 花柳美輝風、 花田吉隆
○傍聴者	2名
○事務局	市民部市民活動担当部長、市民部市民活動推進課長、教育部長、教育部生涯学習スポーツ課長、（公財）武蔵野文化事業団常務理事、吉祥寺美術館館長 他

1 議事

(1) 方針の柱（案）について

事務局より資料2「武蔵野市文化振興基本方針（仮称）の概要と5つの柱について」を用いて説明を行った。

【委員長】 5つの柱（案）について意見交換をしたい。

【委員】 前回の委員の意見を踏まえて、よくまとめていただき、違和感なく読むことができた。「目指したい武蔵野市の姿」があり、それが最後の方針5で受けられていると思うが、「武蔵野らしさ」が色濃く出ていると思う。学校教育では小中一貫教育が話題となっていることにも関連するが、各地域と武蔵野市という全体がコラボレーションしながら進めていけるとよいと思う。地域ではコミュニティセンターも大きく関わってくると思うが、地域と市全体がどのように関わり、役割を担っていくかが大事だと思った。

【委員】 前回欠席したが、内容としてはよいと思う。

【委員】 5本の柱の骨格自体はよいと思う。機会を増やす、創造性、交流や担い手、武蔵野市らしさ等ずっと議論してきた流れである。意見はこのあとの検討すべき事項に関わると思うので、まとめて申し上げたい。

【副委員長】 6つの柱を5つにまとめていただいた資料を見て、意外と普通になってしまったと感じた。以前から言っているように、井の頭池周辺に地震や大火事、戦争等から逃れてきた人々が移り住んだことや、地震にも強い地盤であることを知る教養の高い人々が集まったことなどの様々な背景がある武蔵野の成り立ちが活かされておらず、普通になってしまった印象である。

【委員長】 武蔵野の成り立ちや歴史については、総論の部分で表現される内容であ

と思うが、そういう部分を書かないと、「らしさ」にはつながっていかないと思う。

資料にある文案の項目すべてを残して書くつもりなのか。

【事務局】 方針の一言だけでは分かりにくいので、補足として文章を書かせていただいた。項目から選ぶのではなく、これらの内容を盛り込むことを考えている。

【委員長】 方針1の文案の冒頭では、「特定の客層に留まっている」とあるが、文化事業団はこれまで優れた芸術を提供し、それらのハイアートを楽しみにしてきた人もいたのは事実で、それに応じてきた実績は評価すべきである。友の会だけで全国に8,000人規模の会員がいるような文化事業団はない。マイナスイメージだけでなく、文化事業団を評価する部分もあった上で、取組を広げていくという趣旨にすべきである。

また、方針4の主語は誰なのか。「行政」になるのか。

【事務局】 行政ということになる。

【委員長】 方針4の「育み」は上から目線であり、「発掘する」という表現も失礼である。「つなげていく」も誰と誰をつなげるのか分からない。つなげることが主眼だと思うので、そこに集中した書き方をしてもらいたい。また、関連して、方針5を「育てる」のは誰なのか。いっそ「行政は」と書いてしまうのか、いろいろなアクターが関わるのがよいのか。

【委員】 「育み」とあるが、アーティストたちは自分で育っていかなければならないし、行政がアーティストを発掘することも難しいため、行政にはアーティストが出ていきやすい環境や機会を作ってもらえるとよいと思う。出ていきやすい場所をつくってもらうという考え方の方が、アーティストは納得すると思う。

方針に書かれている内容は、理想的であり、同じようなことをめざしている自治体はたくさんあると思うが、目標が大きすぎるため、本当に実現できるのかが不安である。

【委員】 芸術という言葉が抜けているということにあらためて気づいた。文化芸術の場合は頂点を高めることになると思うが、本方針は裾野を広げるという内容なので、文化振興基本方針としてはよくできており、最低限をしっかりと押さえていると思う。今回は文化振興基本方針を定めて、次にハイアートをトライするという段階があるとよいと思う。裾野を広げることに偏り過ぎていると思う。

【委員】 方針の枠組みとしてはよくできているが、網羅的な内容であるため、方針策定した後に、できていないじゃないかと指摘されかねない。逆に武蔵野市ができる範囲をしっかりと示しておいた方がよいと思う。

- 【委員】 議論を聞いていると、文案は計画の文章というよりも骨組みであり、これが文章になるのであれば、もう少し具体的な内容を書きこまなければならないと思う。前回の議論でも触れたが、何年か経ったら市民に忘れ去られるような総花的な方針ではなく、具体的な成果をつくるために議論をしている。もう少し具体的に何を指すのかを書き込むべきだと思う。前回の議論でタイムフレームをつけるべきだという話があったと思うが、評価・検証までを見込んで書き込んだ方がよいと思う。
- 【委員長】 具体的な実行や評価については、基本方針ではなく、別に書くと思う。
- 【委員】 そうであれば、基本方針では大きな枠組みを書いて、別に工程表が示されていればよいと思う。
- 【委員長】 工程まで示すと計画になるため、方針ではそこまで書く必要はない。
- 【副委員長】 計画策定であれば柱ごとに主な事業やいつまでに実施するのかが具体的に示されるが、これは方針であるため、抽象的な文案こそが重要であると思う。そのため、先程もあえて普通であると発言した。プロであれば自分で成長するしかないが、アマチュアである自分が子どもの才能の芽に気づいた時に、それを確認できる機会や場があればよいと思う。今はそれがないと実感している。
- 【委員長】 以前、子どもの可能性を開いてくれるようなファブラボのようなものがあるとよいとの議論があったように、全てを学校任せにするのではなく、地域や社会で一人ひとりの潜在能力が花開いていくようなことを文章で表現できるとよいと思う。
- 【委員】 この内容では武蔵野市でなくても通じる文章であり、皆の意見をまとめたことによって、これまで積み重ねてきた内容が抜けているように思う。ポジティブな表現で、武蔵野らしい文化に触れる機会を表現できるとよい。武蔵野市が外の人からどう見られているのかを踏まえて書けばよいのではないか。文化振興基本方針ができた後、計画案をつくりながら、条例制定までの工程まで示せるとよい。
- 【事務局】 主語は基本的に行政であるが、まちをどうしていくかという観点もあったため、主語がぶれてしまった箇所がある。

(2) 方針の柱(案)における検討すべき事項について

事務局より資料3「方針の柱(案)における検討すべき事項」を用いて説明を行った

- 【委員】 創造性がなぜ必要なのかということについて、文化芸術は問題解決に直接は機能しないが、創造性が問題を解決するための潤滑油になると思っている。創造性を育むことで、行き詰って何もできない状態から回避す

ることができる。そのために必要だと思っている。

また、多様性という言葉も、便利な言葉だが、様々な社会的な問題を解決できるわけではない。ただ、多様性を担保することで、問題に対して色んなアイデアが生まれやすくなり、苦悩せずに済むようになると思う。大人になったり、専門性が増せば増すほど、自分の価値観が正しいと思い込んでしまうものだが、芸術家の作品や行為に触れることで自分の価値観の狭さに気づかせてくれる。それが創造性だと思う。

文化芸術がなければ貧しくなり、社会の動きも貧しくなり、問題を抱えてしまうようになるが、創造性があれば、固まった考え方がほぐれていき、見方を変えていくことができるようになると思う。

「武蔵野市における活用」とあるが、創造性によって、武蔵野市はこれまでと全く違うアプローチを育むことができると思う。様々なアーティストと付き合っていると、価値観の違いに気づくことが多いが、それこそ行政に必要なことである。アーティストの多様な価値観を知ることによって正しさや絶対性がなくなり、オルタナティブな考え方や方法を知ることによって、異なる視点から考えることができるようになると思う。

中間支援組織については、これまでも再三言っているが、任せることが重要である。誰に任せるのかが重要だが、任せると決めたら任せる。1年などの短期間ではなく、一定期間任せるという腹のくくり方ができればよいと思う。文化芸術はすぐに効果が分かることではないし、アーティスト本人も確信を持っているわけではない。実験的なことを繰り返す中で生み出していくものも多い。

もちろん、誰に任せるかは議論した上で決めなければいけないが、そうした過程を経て任せることによって、新たな価値観に気づき、武蔵野らしい何かがつくっていただけるのではないかと思う。

【委員長】 時間の都合で先にご意見をいただいたが、まずは創造性について話していきたいと思う。

【副委員長】 何度か触れたが、親の介護のためにどうしようもなく大変な状況になって、社会とのつながりも感じられず、つらくなった時に、文化芸術に触れることによって自分を保つことができる力になった。

【委員】 自分の理解する創造性は自己実現であると考えている。自己実現をするための3ステップとして、1つ目は工夫をすること、2つ目は発表すること、3つ目はそれに対して人の認知を受けるということである。人が自分というものを認知してくれる、存在や価値を認知してくれることは人間にとって大事なことである。定年を迎えた人はよく実感できると思うが、退職により社会とのつながりが切断されると不安になる。その時

に、自ら工夫して、創造し、発表して、認めてもらうことで社会とのつながりを再び感じることができる。そういったことから、創造性は、自己実現の要素だと思う。

【委員】 創造性は芸術に関わることだと思うが、文化振興基本方針では違和感を覚える。まず文化とは何かを考えなければ、うまく議論が進まないのではないか。創造性にまで踏み込むのか。

【委員長】 名称では文化としているが、芸術にも踏み込んでいると理解している。

【委員】 その場合、創造性には触れざるを得ないが、文化が創造性に対してアプローチする理由が欲しいということか。

【事務局】 その通りである。柱の文案でも、創造性を育むことに言及いただいたが、創造性が豊かなまちづくりにつながることを示す前に、前提となる創造性についての考えをいただきたいと思っている。

【委員】 創造性を育むということは難しいことだと思う。創造性を育む前に土台として、基礎的なこと、歴史などを知った上で創造していくものであり、漠然と「創造性を育む」と言われても唐突に感じる。

【委員長】 武蔵野市でこれまで提供してきた文化が受動的だったため、そこから「つくる」ことにシフトしていこうという話になったときに「創造性」がキーワードとして出てきた流れがある。

【委員】 そうであれば、自己実現というご意見はその通りだと思う。世の中の変化に対応するために、様々なことをキャッチして適応していくためにも創造性が必要性であり、芸術にかぎらず、生きていく上で創造性が必要だと思う。

【委員長】 その通りだと思う。

【委員】 創造性が自己実現であるという意見は、子どもたちの姿と重ねて理解できる。新学習指導要領に向けた中央教育審議会での議論では、「納得解」という表現をしているが、子どもたちが計算を正確にできるようになるだけでなく、これから世の中の様々なことが不確実だったり、見通しが持てなかったりする中で自分なりの考え方で折り合いをつけていく力をつけることが目指されていて、それも創造だと思う。上手い下手の問題ではなく、大事にしていかなければならないものであると思う。

そのような観点で考えると、行政が主体的に「道路を整備します」という事業とは異なる性格のものであるため、「みんなでしましょう」という表現でもよいのではないか。

子どもが廊下を走ることを注意する時に、「走ってはいけない」と指導するのではなく、「廊下は歩きましょう」と指導するようになったところ、それに応えて、子どもが「僕は廊下を歩くよ」と言ったという話を聞いた。

て素晴らしいことだと思った。子どもが自分の意思を決定し、それを友達に伝えたということが大事だと思う。

文化こそ行政頼りにするのではなく、「一緒にしていきましょう」という考え方であるべきだと思う。

【委員長】 行政主導の基本方針とするということもできるが、役割について考えていた時に、市民も、みんなも含めたオール武蔵野で取り組むという書き方にした上で、行政がやるべき事を別に書いても良いと思った。創造性は芸術だけの問題ではないと思う。教員という立場でも、基礎がなければ創造性が生まれないということはよく実感している。インターネットで何でも調べることが可能になり、ちょっと調べただけで知った気になる人は少なくない。自分の考えを持つことが創造性であり、新しいことを打ち出そうと思って取組んでいても、上手くいかないことが多い。創造性は特殊なことではなく、身近なものだと感じている。インターネットに関連して、AIが発達し、何でも機械がやってくれるようになると、人間は考えることしかなくなってしまふ。創造性は、今後10～20年に子どもたちが生き残っていくために必要なことだと思っている。

次のテーマに移りたい。この方針（案）は、生涯学習の要素が強いように感じたが、文化は個人の体験以上にもたらすものがあると思っている。その点について議論をしてもらいたい。

例えば、吉祥寺は消費のまちとして発展してきたわけだが、今後も消費のまちとして頑張り続けるために、消費にプラスして何か文化的な要素を加味することにより、回遊性の向上など、経済効果が期待できると思う。

【委員】 文化を打ち出す際には武蔵野らしさや特殊性が必要だと思うが、行政区域内で作ることが難しければ、以前も言ったように広域で取り組んではどうか。限定された行政区域内で特殊性を作るのは難しいと思う。

【委員】 商業と文化は密接に結びついていると思うため、商工会議所等と協力して取り組めば、大きな方向性が出てくるのではないか。武蔵野市が文化で確立することができれば、人も多く集まり、商店街にとっても魅力的である。逆に商店街でもそのようなまちづくりをしたいという動きもあると思うので、両者はタイアップできるはずで、商工会議所や商店会の知恵も活用し、どのように文化的にまちづくりができるのかを考えればよいと思う。

【委員】 外国人は文化に対する意識が高く、日本人の自らの文化に対する意識の未熟さを痛感して、日本舞踊を習いにくる人も少なくない。また、日本

の文化には舞踊、武道、芸道などがあり、文化を通して生きていくために必要な礼節も学ぶことができると思う。新の国際人になるためにも、教育の中で当たり前のように組み込んで、卒業するまでには礼節を知ることができるように取り組んでもらえるとよい。

【委員】 文化によって豊かになるという効果は個々にも市民全体にも当然影響があると思う。広く受け入れる武蔵野市の文化は、消費的にも、人材にも双方向の効果があり、さらに周辺のまちにも影響していけば、大きな市の財産になると思う。

【委員】 文化は個性だと思う。他の都市で商業的な利便性が高まれば人が動くこともあると思うが、武蔵野市の文化的な価値があれば留まると思う。文化がまちに効果をもたらすためには、個性を強く保つことが必要だと思う。

【副委員長】 アールブリュットでは吉祥寺美術館を軸にして、吉祥寺のギャラリーと連携することにより、吉祥寺のまちを回遊してもらった。市内外から多くの人を訪れ、吉祥寺という商業的なエリアで、芸術が結びつき、アールブリュットという取組を実現したことが画期的だと評価いただけたと思っている。

福祉と芸術の関係はよく言われていることだが、福祉に関わる活動をしている時、それぞれ個人の人生を尊重して、その人に合った接し方、話し方をしなければならない。生活文化の微妙な違いがあるため、自分の持っているものではなく、その人が歩んできた人生を大事にして、ケアする人の人生を踏まえて接しなければならない。

また、知的障害の方の造形教室なども行っているが、毛筆をした際も、文字を逆から書くなど、教育を受けた上での創造性とは違うものを目のあたりにする。ただ、それを見ていると、意外性や面白さを感じ、元気になれることを感じている。

【委員長】 皆さんから、基本的には文化がまちにもたらす効果はあるとご意見をいただいた。経済や消費に効果があるという話だけでなく、消費と一緒に成り立っているということをもっと書けないか。図書館基本計画に関わった時に、もっと本屋と連携することができないかと考えたが難しいようだった。街中で歩いて買い物ができること自体が日本では珍しくなっており、その中でも吉祥寺は本屋がたくさんある環境にある。他市では本屋が図書館事業に取り組み、市民の満足度が高い事例もあるが、官民、役割分担しながら協力し合って、全体を豊かにしていくということが大事になってきていると思う。そういう体制までを念頭に置いて書けばよいと思う。消費を否定するのではなく、一緒に高め合っていけるように

していけるとよい。

最後に、中間支援機能についてご意見をいただきたい。

- 【委員】 芸術の中間支援は一般的だが、文化の中間支援を行政が実施するのは難しいと思う。
- 【委員長】 思い切って芸術の中間支援にしまえばよいのではないか。
- 【委員】 芸術の中間支援機能としては、行政は任せるしかないと思う。
- 【事務局】 具体的にどのような人を繋いで、何ができるのかイメージするために、ご意見をいただきたいと考えている。
- 【副委員長】 最後の文化をつないでいく担い手は「誰でも」ではないと思う。芸術に関する教育を受けた人やソーシャルワークができる人などの専門家である必要があり、そのような人たちが核になって人々を導く必要があると思う。
- 【委員】 前回の資料を見ていると、どれが中間支援機能になるのか。学校では地域コーディネーターという人材がいて、異動する教員とは違って、地域の中で連絡調整等をする人がいるが、専門知識はないと思う。中間支援機能に何を期待するかによって専門性がどうか変わらると思う。
- 【委員長】 前回の資料では、中間支援という言葉は出ていなかったと思う。文化事業団の活動は今後も続けていくと思うが、文化事業団ができていない部分を担うのは誰か。行政ではなく、繋いでくれる人として、地域をよく知る地域コーディネーターのような人がいるとよいが、そういう人であれば市民でもよいと思う。レベル感が混ざってしまっていると思う。
- 【事務局】 中間支援という言葉を使ったことで混乱させてしまったかもしれないが、組織ではなく、ハブやコーディネートする人材などのことを便宜的に中間支援としている。前回の資料でいうと、方針4と5の部分に該当する。
- 【委員】 副委員長がいうとおり、文化の担い手をつなぐ人材は専門家でなければいけないと思う。そういった人材を「育てる」という言葉には違和感があり、「広げる」などがよいのではないか。育成はアーティスト自身が必要となるため、行政が行うのは無理である。育成は個々がやることであって、人材と人材、団体とつなげる、引き合わせる場所をつくることを考えてもらった方がよいと思う。
- 【委員長】 中間組織はまさにそのようなことをイメージしていると思う。
- 【委員】 中間支援を担う人を育てることも難しいと思う。発掘することや見つけること、専門家を探し出すことが現実的であると思う。
- 【副委員長】 教育というと、エンパワーメントを想起する。貧しいために、教育を受けてない人は本当はやりなかつたこともできないまま、可能性を狭めた

状態が連鎖してしまう。教育を受けることによって、自分にできることや、やってみたいことに気づく事ができる。それを自分で何とかしていくということが教育＝エンパワーメントなのだと思う。「育てる」という表現は能動性がなく、上から目線に捉えられるため、違う言葉に置き換えた方がよい。

【委員】 中間支援機能というかどうかは別として、アーティストを育てるのは無理なので、つなげていくことや発掘することであればできるのではないかと。自己実現の場として文化があり、機会を広げることで市民が輝くことにつながるため、その機会を提供することが行政の役割になると思う。育てるということではなく、自己実現のための機会を与える。行政は場や機会をつくるのが仕事であり、それ以上でも以下でもない。行政が手を引いても、勝手に成長していくのが文化だと思う。文化はつくるものではなく、でき上がっていくものだと理解している。

武蔵野プレイスのように若い人たちが集まり、活動してもらおうような場所をいくつかつくることができるとよい。新しく建物をつくるのは難しいため、図書館の一角や市役所のフロアの一部などをそのような活動の場所として開放するなど、具体的な提案をしながらプレイスの場を広げていく。プレイスのまち吉祥寺のようなことを考えてみてもよいのではないかと。

【委員長】 専門的な人材などレベル感は様々だと思うが、武蔵野市には人材が多く、全国でアートイベントを成功させている人も住んでいる。そういう人たちは武蔵野市の外で活動しているが、地元でも活動してもらおうようにすれば、その活動によって豊かなまちに住んでいることを皆が気づいていくと思う。

実は特色をもったまちであるにもかかわらず、それが見えていないことも実感している。外から見てみると分からないかもしれないが、これほどユニークな人たちが住んでいるまちは少ないと思う。多様な文化を受け入れている人たちもいるという特色があることを明確に打ち出してもよいと思う。

市民が輝くまちを実現するために、明確に打ち出していくことができればよいと思う。

2 事務連絡

(次回日程について)

第6回 1月16日(火) 午後7時～ @かたらいの道市民スペース

3 閉会